

B of A翻訳雑感

誌名	日本農学図書館協議会会報
ISSN	03858081
著者	高野, 正夫
巻/号	17号
掲載ページ	p. 1-3
発行年月	1971年8月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



B of A 翻訳雑感

高野 正夫

全く皮肉な偶然としか云いようがないのだが、B of A (Bibliography of Agriculture)の中から、公害関係の文献をスキャンしてほん訳してみないか、という話があったとき、僕は、たまたま「誤訳」¹⁾という本を読みましたときだった。

そそかしい僕は、密かに、もうほん訳書は読むまいと決めて、手持のほん訳書などは、くず屋に払い下げたら、さぞかし溜飲がさがらぬだろうとさえ思っていた。

「誤訳のないほん訳はない」というのが、古今東西を通じて云い古された言葉であるが、一流の出版社から出ている、著名な教授達の手になる訳書が、誤訳だらけで、肯定と否定さえ取り違えているとあっては、最早絶望的ではないか。

「誤訳」の中に、面白い挿話が載っている。デンマークの新聞で、ある編集者が、七百語ばかりの話を、数ヶ国語に訳させる実験をし

てみた。

まず、デンマーク語からスウェーデン語に、次に、ドイツ語、英語、フランス語と転訳させ、さらにもう一度、デンマーク語に。

最後に、フランス語からのデンマーク語訳を担当することになったあるプロフェッサーは、「こんな小学生が書いたような文章のほん訳に、時間をつぶさせる意図がわからない」と云って抗議したということである。

デンマーク語の原文は、森林の匂いと色、豊かな動物の生活、自然と労働の威厳を描いたリズムカルで、簡潔な文章だったという。

イタリアの古諺にも、「ほん訳者は反逆者」というのがある。

どんな名訳でも結局は、原著書に反するものでしかない、という訳であろう。

もっとも、森鷗外などは、日本語のヴォキヤブラリイは豊富だから、ヨーロッパ語を日本語に訳すのはじつに易しい、と云っていた

編集部注) 当協議会では、日本科学技術情報センターの要請によって、「環境公害文献集 農学の部」の作成に協力している。作業は、日本農学記事索引、World Fisheries' Abstracts と Bibliography of Agriculture (B of A) から公害関係の文献を抽出し、外国文献のうちの必要部分は、日本語で表記するというもので、B of A についての作業は、東京農工大学附属図書館が担当されている。B of A のほん訳とは、このことを指すのである。

という。

しかし、これは天才のばあいの特例であって、一般論として云える性質のものではない。

今までのべてきたものゝ内容は、人文系のほん訳、とくに、文学のことであるから、事実の伝達を旨とするサイエンスのばあいを、こみにして論ずることは、いさゝか軽佻のそりをまぬがれないかも知れない。

文学のほん訳は、むしろ、微妙な陰えいを伝える創作的文体が求められるであろう。

極論してしまえば、サイエンスのほん訳は、記号や構造の単なる引き当てのようなもので、云わば、ほん訳機械のようなものでも、ことはすむのではないだろうか？

正しいほん訳をするためには、外国語についての知識(なるべく多くの)、日本語についての知識、主題に関する専門知識が、重要なポイントだという。²⁾

どの一つをとっても、不満足な僕が、B of Aのほん訳を引き受けたのは、サイエンスのほん訳における、あるメカニカルな性質を考へてのことである。

「公害」という言葉も、よくよく考えてみると、奇妙である。

邦訳の、「ニクソン大統領公害教書」³⁾には、巻末に用語集があって、公害の定義が載っているが、学者によって、広狭にかなりの巾がある。

「公害」という言葉の奇妙さは、元々、主語にならないものを、主語に据えた奇妙さである。

隣の工場以外に汚染源がないのに、「公害」とは奇妙である。

被害者を主語にすれば、本来主語になるべきものゝ責任は、あいまいになる。

いさゝかけずのかんぐりめくが、この言葉は、なかなか狡猾な知恵者の案出した造語ではないかとさえ思うほどである。

一体に、僕達の言語感覚の中には、主語な

どは、サシミのツマぐらいいしか考へない習性がある。

だから、原爆記念碑の主語は、「我々日本人」か、「我々人類」か、などと改めて問われると当惑してしまうのである。

狎れ合った社会では、ことさらにそこまで詮索して、ことを荒立てるよりは、不分明な非論理の世界に安住している人の方が紳士である。

B of A では、タイトルだけしかあてられない。

このこともむずかしい条件の一つである。タイトルは、省略した新聞の見出し語のような性質もあるし、あるばあいには、俳句の季節題のようなときさえある。

関口存男氏のような人でさえ、書物のタイトルは、前後関係が欠如しているのも、ほん訳するのがむずかしい、と云っている。⁴⁾

又、現象としての公害は、かならずしも目あたらしくはないが、所謂、「公害」は、全く新しい分野であり、新造語も少くはない。身近な例で云えば、「スモッグ」という言葉は、初版の「広辞苑」には載っていない。

もっとも、著者は、生前、この語がないことを大分気にしていたらしく、遺歌集「日芙蓉」には

広辞苑ひもとき見るにスモッグという
語なかりき 入るべきものを

と詠っている。

今から七、八年前、宮本憲一教授が岩波新書の、「恐るべき公害」を書いていた頃の「広辞苑」には、「公害」という言葉はなく、「何を研究しているのですか？」ときかれて、「コウガイ」と答えると、一般の人はもとより、社会科学者でさえ、怪訝な顔をしたということである。⁶⁾

レキシコグラフィヤ、ほん訳では、単語一つがわからないために、バカバカしいほどの回り道をしなければならぬことも多い。

Feedlotという言葉は、かなり頻出する単語

だが、どうしてもわからない。

掲載誌名から、畜産関係らしいという推定はできるので、専門家に当たってみたり、関連分野のレファレンスブックで調べたりしてみたが、どうしてもわからない。

ある人のサジェスションもあって、僕は、あっさり、新造語ということにしてしまった。しかし、結着は以外なところからついた。

ニクソンの、「公害教書」の中の、「農業廃棄物」という章に、「フィードロットからの汚濁が、農業による汚染の第一の原因である。」

という文章が目にとまった。

この章には、他にも、二ヶ所、「フィードロット」が出てくるが、その記し方は、いずれも、事明のことを説明している表現であって、どこを探しても、新語としての説明はない。

そこで、1951年版のウェブスターを見ると、

A lot or plot of land on or in which livestock are fed or fattened for market.

とちゃんとでている。

しかし、A standard dictionary of the English language [Funk & Wagnalls] (1899)には、Feedlot は出ていないから、そう古い言葉ではないのだろうか？ とにかくも、この単語一つのために、一週間は振り回された。うかつな話である。

前述の宮本教授の話を考え併せても、七年前、レーチエル・カーソンの名著、「サイレント・スプリング」⁷⁾が、はじめて出版されたとき、これを読んだ大方の日本人は、内心、女史の心配を、いさゝかオーバーな杞憂とは思わなかったのではないだろうか？

しかし、事態はいよいよ深刻で、「沈黙の春」は、来年にでも、日本の何処かの町や村で、現実になりかねない。

否、もう、沈黙の春を終えて、沈黙の夏に入ったのかも知れない。

(たかの・まさを：東京農工大学附属図書館)

文 献

- 1) W・A・グロータース、柴田武 「誤訳—ほん訳文化論」(三省堂)
- 2) 横井忠夫「誤訳・悪訳の病理」(現代ジャーナリズム出版会)
- 3) 「ニクソン大統領環境報告—公害教書'70」(日本総合出版機構)
この巻末の用語集は、同社より、「公害用語事典」(現代事典シリーズ1)としてまとめられた。
- 4) 関口存男「冠詞」第2巻
- 5) 新村猛「広辞苑物語—辞典の権威の背景」(芸術生活社)
- 6) 宮本恵一「現代資本主義と公害」(ジュリスト・1970年臨増号、特集公害)(有斐閣)
- 7) レーチエル・カーソン著、青木築一訳「生と死の妙訳—自然均衡の破壊者、化学薬品」(新潮社)